Bulletin of Tsukuba Developmental and Clinical Psychology, Vol.25 2014

〔ケース研究〕

学校支援ボランティアの役割と課題

――中学校での実践事例を通して――

筑波大学大学院人間総合科学研究科：新井　雅
筑　波　大　学　人　間　系：庄司　一子

Roles and challenges of school support volunteer: Case study in middle school

Masaru Arai and Ichiko Shoji

1．目的

現代の社会情勢を踏まえ，平成20年の文部科学省による教育振興基本計画では，社会で自立して生きていく力や，社会を支え国際社会をリードできる力を育てることが大きな目標として目指されており，様々な教育政策や教育活動を通して子どもたちの「生きる力」の育成が求められている。しかし，現在，様々な学校不適応・問題行動が山積し，いじめ，不登校，高校の中途退学等に加え，無気力，学習意欲の低下，社会性をめぐる問題，児童虐待など，学校現場は児童青年期の子どもたちに関わる様々な問題を抱えている。また，平成19年度から特別支援教育が本格的に推進されているが，発達障害に関する誤った理解や対応によって，不登校，いじめなど様々な不適応問題の表出につながる場合もあるため，子どもたち一人ひとりの教育的ニーズに応える理解と支援，環境整備の充実が求められている（文部科学省初等中等教育局特別支援教育課，2007）。

このような中，スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー，学校評議員，学生ボランティア等，学校で様々な他職種や他の特性を持った人材が関与するようになっている（荊木・渕上，2012）。特に近年，大学生・大学院生による学生ボランティア（以下，学生Vo）の活動が展開され，注目されている（杉本，2013）。これらの学生Voは，教育系の学生に加え（鈴木，2006），心理学専攻の学生が心理支援に関する実習として活動を行う現状もある（岡崎・市毛・尾上・金田・大河原，2008）。

そこで本稿では，学生Vo活動の現状および課題について検討することを目的とする。具体的には，第一に学生Vo活動に言及した文献を通してその意義や課題について概観する。第二に，第一著者が携わった学生Voとしての活動記録を基にその活動の実際について検討する。最後に，以上を踏まえて，学校現場における学生Vo活動の役割と意義，今後の課題を考察する。

2．学校支援に関するボランティア研究の概観

学校支援に関するボランティア活動は，平成10年に当時の文部省による「教育改革プログラム」で取り上げられ，「学校の教育活動について地域の教育力を生かすため，保護者，地域人材や団体，企業等がボランティアとして学校をサポートする活動」とされている（国立教育政策研究所社会教育実践研究センター，2007）。活動内容は多岐にわたり，子どもたちの学習を効率よく進めるために教師の指導を手助けする「学習アシスタント」，安全で快適な学習環境を整備する「環境サポーター」，子どもたちの学習の理解を深めるために学習指導を行う「ゲスト・ティーチャー」，学校施設の維持管理を支援する「施設メンテナー」などがある（文部科学省

生涯学習政策局，2008)。武田・村瀬（2009）も，ボランティア活動を，学校行事参加型（例：遠足引率，運動会補助），授業実践型（例：理科実験），授業補佐型（例：補助教員，放課後学習チューター），特別支援教育補助型（例：通級指導教室補助），校外支援型（例：不登校支援），地域社会連携型（例：キャンプ参加）に分類して捉えている。この内の特別支援教育補助型に関連した活動として，近年では，特別支援教育支援員の派遣も，児童生徒の個々の教育的ニーズに合わせた支援の充実のために重視されている（文部科学省初等中等教育局特別支援教育課，2007)。

このように様々な活動があるが，杉本（2013）によると，学生Voは地域住民によるボランティアに比べ教室の中で教員をサポートする役割を担うなど，日々の教育活動の中で直接子どもと関わりながら個別対応のニーズのある子どもの支援を行っている傾向が指摘されている。

一方，学校現場での心理支援に重点をおいた学生Vo活動として，心理学専攻の大学生・大学院生の派遣に関する研究がある。小林・大熊・小川原・金澤・竹内・中川・牧野・吉岡（1999）は教育委員会との連携の下，保健室など別室の学校不適応児童生徒の心理支援のため学習指導補助員制度として学生を学校現場に派遣することの効果と限界を検討している。奥野・森・大浦・小林・古屋（2003）は，大学・教育委員会のバックアップの下，心理学を専攻とする大学院生を公立小学校に派遣し，教育相談室で相談活動を行う実践過程を報告している。西村・小林・今中・木村・高沢（2007）は地域連携プロジェクトの一環として，公立中学校に学生Voを派遣し，学校コミュニティ援助の視点から，学校全体を対象とした予防的関わりの必要性について検討している。北林・菊地・中川・鵜養（2008）は，大学院生がスクールカウンセリング・ボランティアとして県立高校に参入した実践報告を行い，学生Voがチームで活動を行うことの意義について考察している。黒沢・日高（2009）や黒沢・日高・張替・田島（2008）も，心理学を専攻とする学生を小中学校に派遣するメンタルサポート・ボランティア活動を展開し，その派遣システムの構築や学生Vo自身の変化や成長の実際を検討している。これらの実践では，個々の臨床事例への支援だけでなく，コミュニティ支援や臨床心理学的地域援助が重視されており，学校現場の援助資源として学生Vo活動の意義は大きいと考えられる。

ところで石隈（1999）は，子どもの心理教育的援助サービスを行う4種類のヘルパーのモデルを提示している。心理教育的援助サービスを専門的な立場から実践する「専門的ヘルパー」（例：スクールカウンセラー），職業上の複数の役割の一部として実践する「複合的ヘルパー」（例：教師），自身の役割として行う「役割的ヘルパー」（例：保護者），他のヘルパーとは異なり子どもを援助しようとする自発的な意思に基づいて活動を行う「ボランティア・ヘルパー」（例：友人）である。この分類によると，学生Voはボランティア・ヘルパーとしての役割を担うと考えられる。ボランティア・ヘルパーといっても心理学を専門的に学ぶ大学院生は，心理教育的援助サービスの補助的な役割を担う場合があり，準援助専門家として位置づけることもできる（奥野ら，2003)。この4種類のヘルパーの捉え方は心理教育的援助の専門性の連続を前提としており，多様な課題やニーズを抱えた学校の子どもたちを包括的に支援するためには，これらのヘルパーのチームに基づく援助が重要であり，学生Voも重要な援助資源となる（石隈，1999)。

このような学生Voの派遣には地域によって教育行政機関と大学が包括的に連携を結んで体系的に学生を派遣するシステムを作り上げている場合が多い（嶋田，2006；伊藤，2008)。黒沢・日高（2009）は，地域援助（学校へのマンパワーの提供）と学生教育（学生への効果的な臨床実践実習）を目指すため，教育委員会と大学が協働し，学生の学外臨床実習を媒介として学校への臨床心理的地域援助を行うシステム構築を行っている。その中で，学生Vo派遣事業の目的および活動内容を明確にし，学生Vo側には活動にあたってのガイドライン（守秘義務，

社会人としての常識，トラブル防止の留意点など）を具体的に提示している。一方，学校側には学校用活用案内を用いて，学生 Vo との連携指針や学生 Vo の個人差や限界への理解を求めている。学生 Vo をスムーズに派遣するための事前指導は重要である一方で，学生 Vo の活動は学校現場における「学生の使い方」に依存するところが大きいとされている（嶋田，2006）。したがって，学生 Vo 活動にあたっての活動ガイドラインや学校用活用案内は，個人臨床の治療構造と同様，システムにおける治療構造として物理的・技術的・心理的に学生 Vo と学校を守るものであり，安定したサービスの提供につながる（黒沢，日高，2009）。

学生 Vo を活用することについて各種の調査研究では総じて肯定的評価が多い（杉本，2013）。具体的には，学生にとってこれらの活動は「座学」ではなく「実際の現場を体験する」ことにつながるなど（嶋田，2006），教育効果が指摘されている。黒沢ら（2008）は学生 Vo の自由記述から学生 Vo の変化と成長を検討した結果，「学生自身の人間的変化・成長」（内面的な変化，成長と他者に対する姿勢の変化），「現場の実践」（教師とのかかわりからの学び，子どもとのかかわりからの学び，子どもから得た喜び，協働のための基本姿勢，対人援助の基本姿勢），「授業から得た学び」（支え合いによる仲間意識，ピア・サポートの効果）などが示されている。杉本（2013）によるレビューでも，学生 Vo にとって「子ども理解」（例：児童生徒理解の力），「成長の実感」（例：内面的な変化・成長），「協働のための基本姿勢」（例：コミュニケーション能力），「教職・学校教育についての意識の向上」（例：教職志望の高まり）が示されている。将来的に心理職を目指す学生 Vo にとっても，間接的な臨床実践経験を得る体験につながり（藤原，2000），心理援助の実習体験は非常に重要な学習体験となる（下山，2003）。

一方，子どもにとっても学生 Vo 活動は，「学習意欲の向上」，「ボランティアへの興味関心」，「児童生徒個人の成長」といった肯定的な効果・影響がある（杉本，2013）。子どもにとって学生 Vo は，親や教師ほど世代・立場が離れていないため，年齢が近くて話しやすい兄・姉のような存在となる（石隈，1999）。教師や親とは違う価値観で，叱られたり誉められたり甘えたり愚痴を聞いてもらうなどの経験は，子どもたちにとって成長モデルや価値観，将来生きていくヒントを多く得ることにつながり（伊藤，2008），学生 Vo が子どもたちの成長に与える影響は大きいと考えられる。

さらに，学校や教師にとっても学生 Vo 活動を活用することで人材不足に対応できる，補助的なサポートを受けることができる，学生 Vo だからこそ気づく子どもの様子などを把握できるといった効果や影響がある（重森・有園，2012）。杉本（2013）の検討においても，学生 Vo は学校や教員にとって，「負担軽減」（例：対応に余裕ができる），「指導の充実」（例：個別指導が必要な児童生徒への対応），「活性化」（例：若い学生が来ることで学校が活気づく），「教員の内面の変化」（例：自分の指導の振り返り）などの効果・影響があることが指摘されている。

3．学校支援ボランティアとしての実践事例

以上，学生 Vo 活動に関する検討が行われてきているが，調査研究や文献研究などが多く，学生 Vo 当事者の立場からの実践報告や事例研究は十分に蓄積されているとは言い難い。そこで，以下，学生 Vo として第一著者（以下，著者）が携わった実践事例を取り上げながら，学生 Vo 活動の実際について検討を加える。

著者は，大学でのボランティア募集の紹介・登録を経て，教育委員会からの委嘱を受け公立中学校での活動を行った。このボランティア活動の主な目的は，生徒が学校環境に適応するために，学習支援（授業中の支援や相談室等での個別的な学習支援など）や悩み相談（昼休みや放課後の話し相手など）を行うサポーターとしての活動を行うことであった。その他には，教室で給食を生徒と食べたり，授業に集中できない生徒の補助，相談室の整備・清掃，全校集会等への参加など活動は多岐にわたるが，著者が

担当した学校では主に別室登校生徒への個別支援活動を行うことを求められた。

著者は，X年5月～X+1年3月まで全41回（週1あるいは2回，1日4時間）の活動を行った。また，著者の他に生徒の支援に携わる者はスクールカウンセラー（以下，SC）が1名，社会人のボランティア（以下，社会人Vo）が1名おり，教員との連携の下，この3名で別々の曜日を担当しながら，教育相談室活動を行った。3者の情報交換・連携は主に相談室記録ノートを通して行われた。ここでは，著者が主として携わった事例A，Bへの個別支援に関する学生Vo活動を中心に述べる。

なお，本論文の作成にあたり学校の許可を得ているが，個人情報保護の観点から，学生Vo活動を検討するにあたって支障の無い程度に，個々の事例の詳細には若干の修正を加えている。

1）第1期：X年5月（＃1～5）初期の関係作り

【活動の経過】コーディネーターの教員から相談室や別室教室を案内してもらい，各部屋で過ごす生徒への挨拶や関わりが開始された。特に別室登校をしている中学3年生の男子生徒A，B（それぞれ別の学級に所属）との交流が中心であった。まず，相談室にてカードゲームをしたり，別室教室での個別学習の合間に雑談をしながら関係づくりに努めた。当初，教員からA，Bが別室登校に至った理由を詳細に尋ねる機会は無かったが，生徒たち本人に率直に尋ねた。Aは，人と話すのが苦手で，人が大勢いる場所に苦痛を感じるとのことだった。BはAへの付き添い・サポート役として過ごしていると話し，教室での学習，友達関係の困難感は強くないようであった。実際にAはこれまで不登校状態が続いていたが，Bの誘いのおかげで別室登校ができるようになり，Bを頼りにしているようであった。しかし，B自身も，登校しない日や家でゲームをしている時間について保護者から厳しく責められるなど，家庭でのストレスを抱えているようことを語っていた。当初，各担任と話し合う時間が持ちにくかったため，A，Bに確認を取って著者が聞いた話の内容は，活動メモを残す形で各担任に伝えるようにした。同様に，相談室記録ノートにも各回の活動内容を記載し，SCや社会人Voとの情報共有にも努めた。

【第1期の考察】カードゲームや雑談をしつつ，各生徒との関係づくりに努めた。また関わりの初期であるからこそ，A，Bの抱える悩みを率直に尋ねることができ，それぞれ固有の課題を抱えていることがうかがえた。ただし，Bには，Aのサポート役というよりも，背景には家庭環境の複雑さを抱えているようであった。また，活動開始当初ということもあり，まだA，Bの両担任との情報交換や話し合いは十分ではなく，著者としても手探りにボランティア活動を行っている状態であった。

2）第2期：X年6～7月（＃6～19）活動の展開と関係の変化

【活動の経過】A，Bから進路の話題が出るようになった。特にAは自分の考える進路について両親から強く反対を受けるのではないかと懸念し，自分の意思を両親や担任にどう伝えるかが課題となっていた。著者はAの気持ちを聴きつつ，担任や両親への気持ちの伝え方を共に考えるようにした。Bとの関係にも変化が見られ，AはBと一緒でなくても一人で登下校する日が見られた。A，Bの担任との情報交換も徐々に進み，Bの担任から進路希望調査を書くのを手伝ってあげてほしいなどの要望もあった。A，Bの両担任とも学力面を心配しており，著者も個別学習時間はできる限り丁寧に学習のサポートを心がけた。しかし，この時期には反社会的な問題を抱えた3年の男子生徒Cの対応も求められ，A，Bへの関わりが薄くなり，A，Bから「Cに（著者を）取られた」などの不満も受けた。著者は学生Voとしてどの生徒に対しても関わり・サポートする役割であること，A，Bのこともこれまで通りサポートしていきたい意思を伝えるようにした。その他には，職員室で教員と給食を食べながら生徒の話を聞く機会

や，学生 Vo が集まる研修へ参加する機会もあり，教育センターの相談員からの助言や他の学生 Vo との情報交換や交流，活動の悩みを共有することができた。一方，A, B の欠席時など学生 Vo としての活動が求められない場合もあり，その時の過ごし方が自身の課題となった。

【第２期の考察】各生徒や担任との関係の変化や深まりに特徴づけられる時期であった。特に，A，B から受けた不満のように，学生 Vo としてどの生徒に対しても丁寧に関わる基本的な姿勢が問われる場面があった。その他，担任との情報交換や職員室で教員と給食を食べる機会，学生 Vo の研修など，手探りで行っている活動の中で様々な交流ができた点は，学生 Vo として活動を円滑に進めるにあたって役立つ機会であった。

３）第３期：X 年９月（＃20～24）体育祭への参加

【活動の経過】A，B 共に夏休み中に高校見学を行い，進学を目指す高校はほぼ固まってきたようであった。また，体育祭への参加が課題となり，自分にとって最後の大会ということで B は比較的すんなりと学級に戻って体育祭の練習に参加した。一方，A は，B や担任からの勧めを受け体育祭に参加する意思を示していた。しかし A は他の生徒と共に活動することへの不安や緊張が強くあったため，練習に参加する場面で何が起きそうか事前にイメージし，その時にどのように振る舞えば良いか，一緒に考えるようにした。結果的に，A，B 共に体育祭には参加することができ，A は徒競争で１位を取ることができ，喜んで報告してくれた。しかし，教室復帰につながることはなく別室登校での支援が続いた。その他，この時期には部活中の生徒への声かけを行うなど，学生 Vo として A，B 以外の生徒の関わりにも広がりが出てくるようになった。

【第３期の考察】A，B の体育祭への参加に特徴づけられる時期であった。また，体育祭への参加にあたって，他の曜日に勤務する社会人 Vo も A，B への励ましを行っていた。それぞれ活動日が異なるため話し合う機会は少ないが相談記録ノートの記述を通して社会人 Vo とも意思疎通を図りながら活動ができたと考えられる。

４）第４期：X 年10～12月（＃25～32）受験への準備

【活動の経過】A，B は受験に向けて校内のテストを受けることが課題となっており，著者は担任とも情報交換しながら A，B の試験の受け残しを１つ１つこなす作業に寄り添うようにした。A は自らの答えが不正解になることへの不安や拒否感から，少しでも間違っているかもしれない問いは空欄のままにして提出してしまう傾向があったため，空欄を埋めることや見直しをすることの大切さを説明しながら励ました。一方，B は成績が良くないと保護者から叱責を受けてしまうというプレッシャーを感じており，受験に失敗したらどうしようという不安を話していた。著者は出来る限りその気持ちを聴きつつ担任にも B の状態を伝えるようにした。担任は B の気持ちに理解を示しつつ，家庭内で長時間ゲームをするなど，保護者から注意を受けるような生活をしている面があり，B に生活を改めてほしいという思いも著者に伝えられた。

【第４期の考察】受験の準備に関する支援に特徴づけられる時期であった。A は試験問題への取り組み方という個人的な課題を抱えていたが，B は依然として家庭からのプレッシャーを抱えていた。学生 Vo として担任との情報交換はある程度できたものの，立場上出来る限り受験に前向きに取り組めるよう A，B を励ますサポートを中心に行うことで精一杯であった。

５）第５期 X＋1年１～３月（＃33～41）：卒業に向けて

【活動の経過】A の担任は A の学力を心配しつつ，高校に入学しても A が対人関係の中で無事にやっていけるのか懸念していた。そのような中，A は TV で見た番組をきっかけに自分の状態について振り返る発言が見られた。具体的な内容は秘密として語られることは無かったが，

対人関係で自分が感じること，そこでの振る舞い方について，自分に当てはまるものが多かったと述べた。TV番組を見て良かったと思っていること，自分の状態を自分なりに克服したいという気持ちを話した。一方，Bは依然として保護者からのプレッシャーを感じているようであった。むしろ，そのストレスから逆に勉強に身が入らず登校しても勉強に集中できなかったり，ゲームやアニメの話をする様子がみられた。担任は，Bの矛盾した行動が理解しかねることや，今の時点で保護者の意識や関わりを変えることは難しいと述べた。

卒業式では，Aは不安や緊張があったようだが，A，Bとも参加することができた。AはBや著者と会えたことがうれしかったこと，特にBのおかげで学校に登校できるようになったことを話していた。一方，Bは受験結果や家庭状況が気になったものの他のクラスメイトと共に写真を撮りながら，卒業式の日を過ごしている様子が見られた。その後の情報では両名とも無事希望の高校に進学することができたとのことであった。

【第5期の考察】 この時期には受験に向けて学習支援を継続し，Aに対しては高校入学後の生活をイメージしながらAの話す内容を丁寧に聴くようにした。Bに対しては，家庭状況が気になったものの，学生Voとしての立場で出来るサポートを意識して，継続的にBの話を聴き，学習を少しでも進められるよう励ますことを継続した。

4．総合的考察

本研究では学生Vo活動について，第一に先行研究をもとに検討し，第二に著者の実践事例をもとにその活動の実際をまとめた。以上2点の検討を踏まえ，（1）学生Vo活動で求められること，（2）学生Vo活動・研究の課題について考察する。

1）学生Vo活動で求められること

学生Voの活動で求められることの第一は，子どもの生活に寄り添う点である。著者の実践例にも示されるように学生Vo活動は，SCなどが相談室内で行う心理カウンセリングとは異なり，子どもの学習，休憩，給食，登下校，学校行事など，様々な学校生活場面で子どもと直接関わることができる。その点で，学校生活全体を通して子どもの様子を把握する機会が得られたり，学校生活の流れに寄り添いながら子どもをサポートすることができるため，この利点を活かした活動が求められる。

第二は，能動的な活動を行う姿勢である。この点は著者自身も可能な範囲で意識した。具体的には，各担任に対して子どもに関する情報提供ができるよう1日の活動終了後にメモとして自らが関わった活動やその時の子どもの反応，子どもの様子から自分が考えたこと，今後どのように子どもと関わっていこうと考えているかなどを記録して各担任の机に残すようにした。担任の時間があれば直接話をした。活動前にも，その時々の活動で子どもに関わる際に気を付けることがあれば教えてもらうようにした。その中で得られた情報や担任からの意見を踏まえて，日々の関わりに生かすことができた。立場は異なるがSC実践においても，待ちの姿勢ではなく気になる生徒に関して積極的に教師に尋ねる能動的な姿勢が重視される（土居・加藤，2012）。教師とは異なる立場の関係者が学校現場で活動を行うという点で，学生Voにおいても重視される姿勢ではないかと考えられる。

第三は，他のVoとの連携や役割分担である。実際，本実践例では，他の社会人Voと直接的に相談し合ったり相互に意見交換しながら活動を展開する機会が多くあったわけではない。しかし，相談室記録ノートを通して各々がどのように各生徒に関わっているかを考えながら活動することができた。また，複数のVoがいることで自身が関わる機会が持ちにくい生徒を他のVoに任せることができるなど，それぞれ異なる立場から，多様な生徒と関わりを持つことができる（北林ら，2008）。本実践例でも，著者が関わる機会の少ない別室登校の女子生徒との関わりは主に社会人Voが関わる機会が多くあった。

複数のVoがいることで生徒自身にとっても話しやすく相性の良いVoに出会いやすくなることもある（奥野ら，2003）。様々な課題や困難を抱えた生徒がいる中で，共に生徒支援に関わる他のVoの存在は心理的な支えともなる（北林ら，2008）。

第四は，コーディネーターの教員とのつながりである。本実践例では詳細な記述ができていないが，著者が活動を行う背景ではコーディネーターの教員から各生徒へのつなぎ・学校行事への参加など，活動全体に対する助言をもらうことができた。学生Vo活動は，派遣先の学校での活用のされ方や学生Voを担当する教員からの助言に基づいて行われる（嶋田，2006）。コーディネーターの教員には，学校支援に関わるボランティア活動が円滑に展開されるよう，関係する人々や子どもをつなぐ“触媒”的役割を果たすことが求められる（国立教育政策研究所社会教育実践研究センター，2009）。学生Voにとってはコーディネーターの教員とのつながりを深めながら活動を展開する必要がある。個性豊かな特徴を持つ学生Voを臨機応変かつ効果的に活用するため，コーディネーターの働きは非常に重要となる。

2）学生Vo活動・研究における課題

次に，学生Vo活動・研究における課題を考察する。第一は，学生Voを活用した連携支援モデルの構築である。実践場面では，人手が欲しいからという理由だけで学生Voを活用するだけでは問題は解決せず，安易に活用することは逆効果となる危険性もある（寺井，2008）。特に，学生Voは職業的な役割ではなく各々の自発性に基づいて行われる点で非構造的で変化しやすく（石隈，1999），活動に参加する動機や熱意にも差がある可能性がある。これらの特徴を持つ学生Voとの連携やチーム援助を効果的に進めるための検討が必要である。

第二は，組織的な連携および学生Voのバックアップ体制である。これは，学校内における学生Voの活用の仕方に留まらず，学校と大学・教育委員会との連携体制に関する課題が含まれる。先行研究では学生Voの派遣・活用・バックアップ体制に関する実践例はいくつか示されているものの（たとえば，小林ら，1999；黒沢・日高，2008），組織的な体制を整える検討は未だに発展途上である（杉本，2013）。実際のところ，著者の実践例においても学生Voとしての研修や継続的な指導体制が十分であったとは言い難い。日々の学生Vo活動での迷いを共有し適切な助言を受けるための研修や継続的な指導体制，大学や学校内での学生Voを交えた打ち合わせやカンファレンスの設定（嶋田，2006）に加え，学生Voがチームで活動を行う際のメンバー間の相性や意見の対立・葛藤とその乗り越え方，学生Voを学校内でどう活用するかに関する教員間の意見の相違への対処（西村ら，2007），教員側の学生Voを活用するにあたっての迷いや試行錯誤へのサポート（寺井，2008）が課題である。不必要な葛藤・迷いを防ぎ，スムーズに学生Voを派遣・活用するためのシステムの構築が必要であろう。その際には，汎用性のあるシステム構築と同時に，各地域の特徴に応じた学生Voの募集・派遣・活用・バックアップ体制が吟味される必要がある。

第三は，学生Vo活動の評価である。ボランティア活動のシステムを維持・発展するためには，その活動の評価および既存のシステムをより効果的に発展させる作業が必要となる（黒沢・日高，2009；杉本，2013）。学校や子ども，学生Voの立場から効果を測る尺度の開発と継続したデータを蓄積し，ボランティア活動の効果・影響を検討し，さらなる活動の充実の検討に生かしていく必要がある（杉本，2013）。

第四は，学生Vo活動の引き継ぎに関する課題である。本実践例のその後の展開においても，著者の活動終了後に次の学生Voへ引き継ぐ機会が十分に持てず，引き継ぎを丁寧に行う体制そのものも構築されていなかった。実際に，学生Voの非構造的で変動性の高い特徴を考慮すると，同一の学生Voの長期的かつ継続的な活用は難しい。同時に，学校も変動が激しいコミュニティであり，教職員の異動や入学・卒業で集団の雰囲気も変化する（西村ら，

2007)。そのため，積み重ねてきた実践例や個々の学生 Vo の体験を，いかに次の学生 Vo 活動へと継続的に引き継ぐかという点も重要な検討課題となる。

第五に，学生側に学生 Vo 活動から十分に学ぶ姿勢を促すことである。学生 Vo にとって活動に参加する動機は様々であり，また，必ずしも最適な実習・ボランティア経験をすることができるとは限らない場合がある。しかし，自らが得た体験から最大の効果を得るためにどのようなことができるか，学生側にも自らの体験を効果的に深める学習態度が必要となる（Corey & Corey, 1998)。たとえば学生 Vo は，立場上，個々の生徒に関する情報が不十分な中で関わらなければならない場合も少なくない。しかし，逆に言えば，「このような言動・態度・様子を示す子どもの心理や家庭状況，学校生活，これまでの成長過程はどのようなものであったのだろうか」と，子どもの様子からその背景事情を豊かに想像する姿勢を身につける機会ともなる。また，学生 Vo が知り得た情報を，誰にどのように報告することが学校システムにとって有用なのかを考えて動くことができるようになった（奥野ら，2003）というように，学校システムを意識して動く姿勢は学校臨床における基本（吉川，1999）として重要な学びともなる。学生 Vo 時の体験によっては，個々の学生のその後の職業選択や学校現場への関わり方に影響する可能性もある。学生 Vo を活用する学校，大学には大学生・大学院生が効果的に学ぶ姿勢を促すためのサポートが求められる。

5．引用文献

Corey, M.S. & Corey, G. (1998). *Becoming A Helper Third Edition* Brooks/Cole Publishing Company（下山晴彦（監訳）・堀越　勝・堀越あゆみ（訳）　2004　心理援助の専門職になるために―臨床心理士・カウンセラー・PSW を目指す人の基本テキスト―　金剛出版）

土居正城・加藤哲文 (2012)．中学校におけるスクールカウンセラーと教員の連携促進に関する一事例―スクールカウンセラーが児童生徒に積極的に関わることの意義―　学校メンタルヘルス，**14**，199-210.

藤原勝紀 (2000)．臨床実践指導研究の課題と方向性　京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要，**4**，60-70.

荊木まき子・淵上克義 (2012)．学校組織内の児童・生徒支援体制における協働に関する研究動向　岡山大学大学院教育学研究科研究集録，**151**，33-42.

石隈利紀 (1999)．学校心理学―教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス―誠信書房

伊藤亜矢子 (2008)．メンタルヘルスを支える地域ネットワークづくり　児童心理，**62**，156-162.

北林幸子・菊地優子・中川知佳・鵜養美昭 (2008)．　高等学校における院生スクールカウンセリング・ボランティアの報告―実習経験の差を活用したチーム参入―　心理臨床学研究，**26**，347-352.

小林正幸・大熊雅士・小川原麻実・金澤多希子・竹内佳子・中川由佳子・牧野七重・吉岡京子 (1999)．学校における大学院生による学校不適応児の援助に関する研究―学習指導補助員制度の効果と限界―　東京学芸大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，**23**，75-87.

国立教育政策研究所社会教育実践研究センター (2007)．学校支援ボランティア活動の推進方策に関する調査研究報告書　http://www.nier.go.jp/jissen/chosa/rejime/2007/06_volunteer/99_all.pdf

国立教育政策研究所社会教育実践研究センター (2009)．学校支援ボランティアの活動を支援するコーディネーターの養成等に関する調査研究報告書　http://www.nier.go.jp/jissen/chosa/rejime/2009/06_volunteer/99_all.pdf

黒沢幸子・日高潤子 (2009)．臨床心理的地域援助としての学校支援学生ボランティア派遣活動のシステム構築　心理臨床学研究，**27**，

534-545.
黒沢幸子・日高潤子・張替裕子・田島佐登史 (2008). 学校教育支援ボランティアを体験した学生の変化・成長―その様相とキャリア教育の視点からの考察― 目白大学心理学研究, **4**, 11-23.
文部科学省初等中等教育局特別支援教育課 (2007).「特別支援教育支援員」を活用するために 特別支援教育, **28**, 32-42.
文部科学省生涯学習政策局 (2008). 文部科学省におけるボランティア活動の推進について http://www.jasso.go.jp/syugaku_shien/documents/20tudoi_mext.pdf
西村昭憲・小林厚子・今中博章・木村真人・高沢佳司 (2007). 学生ボランティア・ヘルパーを学校支援にどう活かすか?―学校コミュニティ援助の視点から― 東京成徳大学臨床心理学研究, **7**, 10-19.
岡崎香織・市毛 睦・尾上明日香・大河原美以 (2011). 小学校におけるボランティアヘルパーによる支援の実際―ネガティヴ感情表出場面での対応― 学校心理学研究, **11**, 81-92.
奥野誠一・森 明子・大浦香奈子・小林正幸・古屋真宏 (2003). 小学校における教育相談室の開設と運営の試み―大学と教育委員会のバックアップによる大学院生教育相談員の活動― 東京学芸大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, **27**, 41-54.
重森文香・有園博子 (2012). 学校教員の学生ボランティアの捉え方―M-GTA を用いた教員の発話分析によるカテゴリー生成― 発達心理臨床研究, **18**, 95-105.
嶋田洋徳 (2006). 教育現場における学生ボランティア活動と課題 月刊学校教育相談, **20**, 22-25.
下山晴彦 (編) (2003). 臨床心理実習論 誠信書房
杉本希映 (2013). 大学生による学校支援ボランティアの現状と課題 目白大学心理学研究, **9**, 107-119.
鈴木光生 (2006).「学生ボランティア」学校サポート事業 月刊学校教育相談, **20**, 34-37.
武田明典・村瀬公胤 (2009). 日本における大学生スクールボランティアの動向と課題 神田外語大学紀要, **21**, 309-330.
寺井まり子 (2008). 小学校で活動する学生ボランティアに関するエスノグラフィック・リサーチ―臨床心理学の立場から― 臨床心理学研究, **6**, 87-107.
吉川 悟 (編) (1999). システム論からみた学校臨床 金剛出版